石川（いしかわ）　勝美（かつみ）さん

柳川緑道街路樹愛護会

［石川勝美さん］
きれいなまち並みは、市民との協働が不可欠と語る。

●人を中心としたまちづくりの発想を！

道路段差や公共交通機関の現状を見ると、依然として車中心、ハード整備中心の都市構造となっている感じがする。少子高齢化、環境問題など、今後の課題を見据えると、まちづくりの発想の原点を人に求めるべきではないか。

まずは、歩行者や自転車、セニアカー、ベビーカー等が移動しやすいように、段差の解消、自転車帯等の整備や、低床バスの拡充、トラムの設置など、様々な取り組みを進めるべきと考える。

また、無電柱化された美しいまち並みは、何世代にも引き継ぐべき市民共有の財産であるため、市民が沿線の清掃や植栽の管理を行うべきである。

●層の厚い産業構造を！

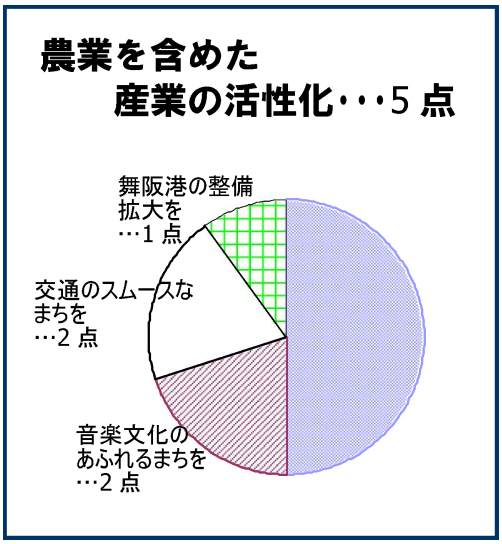
浜松には、世界に冠たる企業が数多く、すばる望遠鏡には、浜松ホトニクスの最新技術が採用され、日本のものづくりの最新技術を凝縮した新幹線の整備工場も立地している。

しかし、最近まで続いた円高や経済の低迷の影響などから、ひと頃に比べ浜松の産業の活力が落ちてきたと感じている。

ライバルである静岡市と比較し、浜松の経済を活性化するためには、強みであるものづくりを伸ばしつつも、第 1 次、第 3 次産業の充実を図るべきと考える。

ものづくり産業について、地元大学との連携強化をより進めるとともに、工業製品等の歴史的価値に着目した収集・展示を行い、観光面との相乗効果を図ってはどうか。

また、金融サービスや営業の本店・支店等の拠点を積極的に誘致すべきである。



【浜松市への期待度グラフ】

●浜松の人づくりの風土の活用を！

浜松は、徳川家康はもとより、水野忠邦など江戸幕府の中枢を担う人材が多数輩出し、明治維新後も本田宗一郎をはじめ、我が国の経済のリーダーたちが生まれ育ってきたまちである。

近年では、ピアノコンクールなど、世界の才能ある人材を発掘する役割を担っている。

こうした浜松の人づくりの風土を活かし、産業や文化様々な分野で、裾野を広げ、トップの誕生に結びつける取り組みを進めてほしい。

また、文化面で「酒井の太鼓」の歌舞伎、オペラの上演も企画してはどうか。

石野（いしの）　好弘（よしひろ）さん

NPO 法人ひずるしい鎮玉（しずたま）理事長

[石野好弘さん]
2013 年 NPO 法人設立。元引佐地域自治センター所長。環境保全活動を通じた地域活性化に尽力。

●市町村合併で豊かになったもの

市町村合併で何が変わったのか考えてみたい。自然では、遠州灘、浜名湖、天竜川、中山間地域などが広がり、伝統文化では、横尾歌舞伎や寺野・川名ひよんどり、懐山のおくないなどが増えた。産業分野では、ホンダ、スズキ、ヤマハ、浜松ホトニクスなどに代表される世界的な企業が更に集積したことも挙げられる。

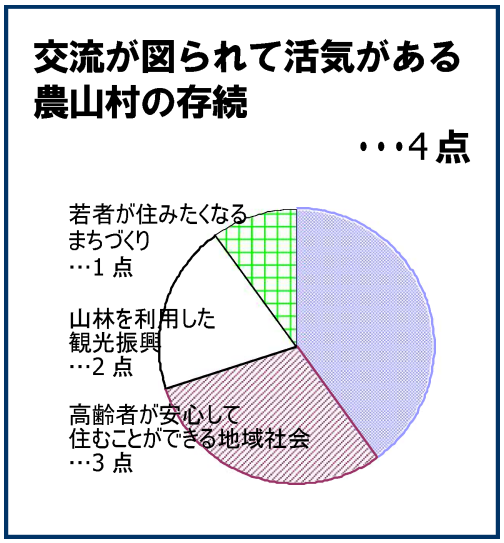
大きく分けて、自然、産業、伝統文化の分野で、都市のイメージが豊かになったと感じている。

●中山間地域があってこそ

中山間地域があってこその浜松だと思う。人口が多い地域と違い、政策的にやっていかないと、立ち行かなくなってしまう恐れがあるのが中山間地域。地域の人口が減ったとしても、人と人とのつながりを充実させていけたら、きっと存続していけるのではないだろうか。NPO の活動を通じて、もっと地域の雇用を増やしていきたい。さらに、催しの参加者との交流を深めて、定住人口を増やし、魅力的で活力ある地域づくりを進めていけたらと考えている。

●守り育てたい地域の宝

ひずるしい鎮玉には、「まぶしい」「輝かしい」を意味する地域の方言「ひずるしい」と古くからの地域の名（鎮玉）を用いた。この地域には、貴重な宝として、県下有数のホタルの生息地など、豊かな自然が残る。会として田んぼや川を汚さず、荒らさないように守り育てていきたい。そのためにビオトープの建設等を進めることで、意識の高揚を図っていく。最近では、引佐北部中跡地にメガソーラーを設置した企業が地域協力を約束してくれた。会員や地域住民との連携を強化して、ホタルなどの地域の宝を活かし、ひずるしい地域づくりを進めていきたい。



【浜松市への期待度グラフ】

●インターから人を呼び込む地域に

浜松いなさインターチェンジができて、三遠南信自動車道や新東名高速道路へのアクセスが良くなった。三遠南信地域の市町村や静岡市へ行く際に、時間が短縮されて、とても近くに感じる。インターチェンジ近くには、未活用な土地があるため、アクセスの良さを活かして、物流の拠点としての活用にも期待している。

この鎮玉地域では、人と人とのつながりを大切にしながら、魅力ある地域にすることで、インターチェンジを通じて、他の地域から「人を呼び込む地域」を目指していきたい。

石原（いしはら）　慎介（しんすけ）さん

有限会社石原や　代表取締役

［石原慎介さん］
地域のコミュニティ、交流の場として、昔ながらのスーパーであり続けたいと語る。

●国土縮図型都市が可能にした自社農園

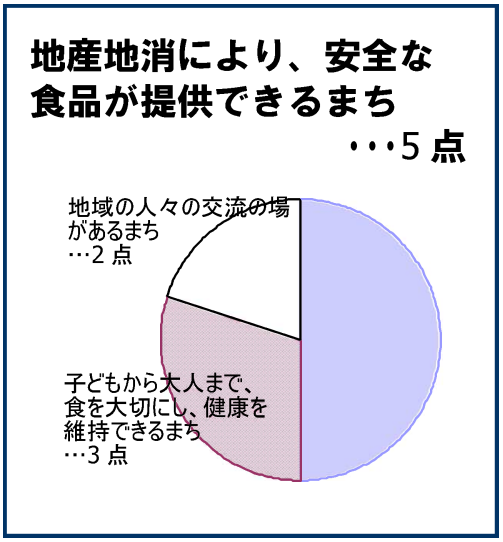
浜松は国土縮図型の政令指定都市であると言われる。都市部の他、山、川、海、湖があり、四季の変化もある。中山間地域と沿岸部では土質も大きく違い、栽培に適した野菜も異なる。この特性を利用して、市内の各所で自社農園を展開し、少量多品種の野菜の生産を始めた。お客様に安全で新鮮な野菜を届け、地産地消の素晴らしさ、浜松の野菜のおいしさを届けていきたい。

●市民の健康を食で守りたい

行政では、病気の予防を目的とした施策を推進している。これから先、高齢化が更に進展していけば、その重要性は増す。しかし、健康維持を考える上で、食が軽視されていないだろうか。人は食に支えられて生きている。若い頃の食生活の影響が出るのは数年、数十年先である。市民に安全な食を提供することは、将来的に医療費の削減につながると考える。病気や介護の予防のために事業を実施するのであれば、その目的達成のため、人々が地元の食材を入手しやすくすることも、効果的な健康維持事業である。

●食育の最大のチャンスは学校給食

核家族世帯、夫婦共働き世帯が世帯構成の中心となっている。この傾向は、食生活に大きな変化をもたらしている。家庭で手づくりの味を知る機会が減り、外食や出来合いの弁当などでの食事が増えている。味覚は 3 歳で完成すると言われており、また、身体の成長段階でもある子どもたちへの影響は特に大きい。家庭環境の変化は時代の流れであり、すぐに変えられるものではないが、学校給食を食育の場に変えることは出来る。例えば、地産地消を強力に推進する学校には予算上のインセンティブを与え、軌道に乗ったら市内全域に拡大するなどして、将来を担う子どもたちに手づくりの良さを学ぶ機会を提供してほしい。



【浜松市への期待度グラフ】

●まごわやさしい

豆、ごま、わかめ、野菜、魚、しいたけ、芋の頭文字である。昔から、これを食べれば健康でいられると言われている食材である。と同時に、市販の弁当ではなかなか摂取できない食材である。大量物流により画一的で低価格な食品が重宝されているが、海の幸、山の幸の宝庫である地元浜松の食材を、消費者が入手しづらくなる原因にもなっている。今一度、地元食材の素晴らしさ、手づくりの良さを見直し、食の大切さを再認識する機会を仕事を通じて市民の皆様に提供していきたい。

伊豆田（いずた）　悦義（えつよし）さん

静岡県弁護士会（浜松支部）

[伊豆田悦義さん]
子どもたちが、自分自身を大切にし、存在して良いと実感する社会をと語る。

●「未来の担い手」子どもを大切に！

30 年先は、自分たちではなく子どもたちが社会を担っている。30 年後を見据えたまちづくりを考えるなら、子どもの目線に立った成長・発達への支援こそ最重要課題であろう。

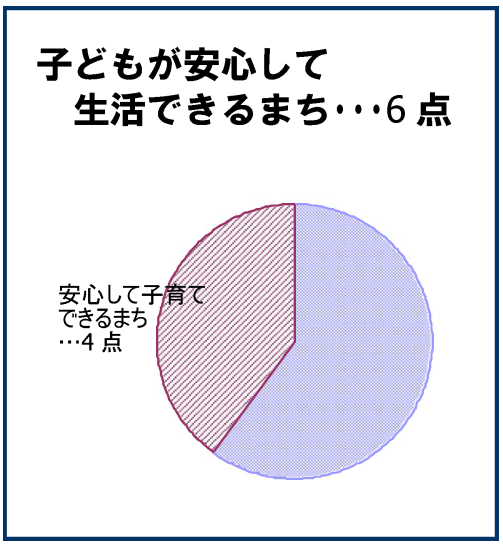
現在、体罰、いじめ、犯罪など、日常的に子どもが被害を受ける環境にある。大人にとって、都合の良い教育でなく、まずは、子どもの人格を尊重し、自尊心や自己肯定感を持てるような環境づくりを進めることが、私たち大人の責任である。

また、長引く不況から、子育て世代に余裕が無くなっている。親が幸せであって、はじめて愛情を注ぐことができる。そうした点に十分配慮しながら、子育ての理解と支援を、地域社会全体で取り組むような環境づくりをすべきだ。

●外国人とのより良い共生社会の実現を！

弁護士として、様々な法律問題を通じて外国人と関わる機会が増えてきた。日本人と外国人のコミュニティがそれぞれ個別に分かれていて、相互に溝や不信感が募り、トラブルに発展することがある。国際色豊かで外国人がたくさん暮らしていることは、浜松の強みであり、地域が新たな活力を得るチャンスでもある。まずは、地域が外国人を分け隔てなく受け入れ、相互理解と信頼感の醸成を図るべきである。特に、外国人児童を支える取り組みが十分でないと感じるので、行政には、外国人児童向けの教育環境に力を入れてほしい。

●バランスのとれた住みよい生活環境を！



【浜松市への期待度グラフ】

浜松市は、政令指定都市に相応しい規模の、施設等を持つとともに、豊かな自然環境や、温暖な気候に恵まれ、生活上必要なものは市内で完結し、非常にバランスのとれた、住みやすいまちである。

ただ、静岡市と比べると、中心市街地に魅力ある店舗が少なく、人気もない。また、道路事情なども車中心のつくりで、歩行者や自転車には不便である。少子化時代になって、今後の市の産業を牽引するような、優れたアイデアを拠出できる優秀な人材を浜松に引き付けるためには、教育や自然環境など、生活全般にバランスのとれた住みやすいまちづくりをより一層進めることが必要である。地域全体で魅力あるまちづくりを進められたらと思う。

和泉（いずみ）　秀実（ひでみ）さん

アングイア浜松株式会社(アグレミーナ浜松 運営会社)
代表取締役社長

［和泉秀実さん］
かつてはフットサル日本代表選手として活躍。プロフットサルチーム「アグレミーナ浜松」の運営会社の代表に平成 25 年 5 月に就任

●人が集まることで何かが生まれる

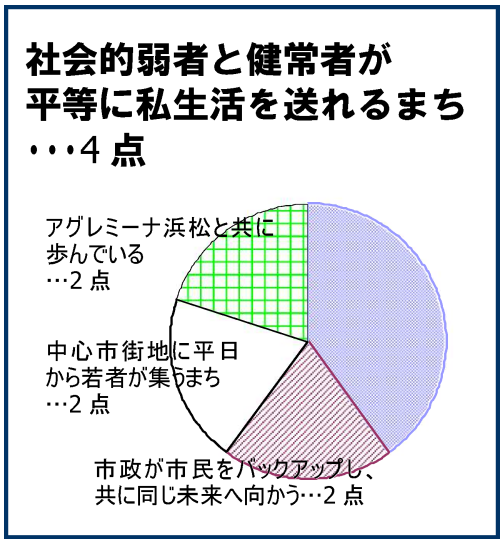
大型ショッピングセンターができ、一つの場所でなんでも消化できる場所が中心市街地から郊外に移っている。松菱跡地にフットサル場ができるという話もあったが、ここにこそ人が集まるものができ、30 年後には活気あるまちになっていてほしい。具体的に何がということは言えないが、人が集まることで何かが生まれ、そして、アグレミーナが、人が集まるきっかけの一つになることができればと考えている。

●市民主体の活動をバックアップ

市政と市民の意識や行動に違いがあるのではないか。市の事業のプロセスや効果を評価するには市民の目線が必要だと考えるし、参加することで市民も満足する。例えば、浜松まつりにディズニーパレードが来たときも、多くの市民はディズニーパレードを見るためだけにまちなかに集まり帰っていった。何のために実施するのかなどが十分に理解されていれば、商店街にお金が流れるような仕組みも構築でき、更に良いものにできたと思う。市民が主体的に活動するため、行政による投資なりバックアップなりが必要なこともある。それは補助金だけでなく、活動場所の斡旋などでもよいと思う。

●アグレミーナを「浜松といえば・・・」の一つに！

浜松は、日本におけるフットサルリーグ発祥の地であり、フットサルの聖地と言われる。今年、F リーグの他のチームであまり観客数が伸びない中で、アグレミーナ浜松のホーム開幕戦には多くの来場者が訪れ、リーグからも浜松は条件の良い地域だと言われている。



【浜松市への期待度グラフ】

アグレミーナ浜松は、地域活性化集団として地域に貢献する活動を進めており、平成 25 年 6 月には NPO 法人を立ち上げた。訪問スクールや選手と触れ合える機会を増やし、子どもたちに夢と元気を与えていきたい。また、子どもたちの競技力向上に長期スパンで取り組み、最終的に日本代表を育てたい。

30 年後には、アグレミーナ浜松が今以上に市民チームとして存在していたいし、「浜松」から連想されるものの一つになっていたい。チームのエンブレムに市章を入れさせてもらったことに責任も感じている。今以上にチームの価値を上げていかなければならないと考えており、浜松市の発展にアグレミーナが貢献できるようにしたい。

伊藤（いとう）　昌彦（まさひこ）さん

中野町煙火大会実行委員会会長

有限会社ステップイトウ

[伊藤昌彦さん]
中野町商店会が解散する中でも、地域に根付く電器屋さんとして頼りにされている。

●歴史ある中野町の花火を守る

浜松市の花火大会は全国一の開催数。21 年度のデータでは、181 件にのぼる。中野町の花火は、六所神社の祭事として始まり、推定 130 年の歴史がある。天王町の花火に続いて、浜松市で 2 番目ではないかと言われている。

明治時代の頃、一度中断したら疫病が流行したことがあった。戦時中であっても、境内に氏子が集まって、線香花火で対応したと聞いている。地域にとっては、それだけ大切なお祭りである。その後、年々規模を拡大し、現在の打ち上げ数は 4,000 発。天竜川の堤防は、観客でギッシリになるほど有名な祭事になった。

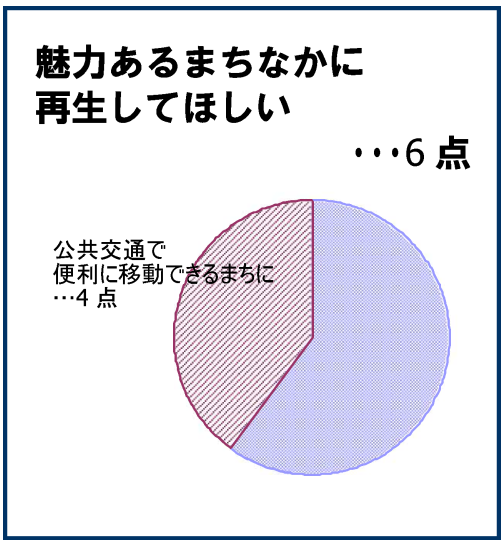
地域イベントとして手を広げてきたが、明石の花火大会の事故以来、厳しい保安計画の作成が求められる。今後、自分たちの手に負えなくなる心配がある。

かつては、24 歳になると祭りの親方を担うといった町の決まりがあった。その後、地元消防団が祭りを引き継ぎ、規模を拡大してきた。まずは、祭りを盛り上げ、若い人たちの参加を求め、花火大会の歴史を継承していきたい。

●地域の電器屋さんの将来

世の中は、セルフ対応が主流になってきた。ガソリンもセルフになっているし、お酒の配達もなくなっている。電化製品も大型量販店で買ってきて、自分で取り付けるのが一般的な考え方。大型量販店の強みは、在庫があること。安くて早い製品の提供が求められている。また、エアコンなど、インターネットで購入し、取付け工事のみの依頼も増えている。これからの考え方なのかもしれない。地域の電器屋は軒並み減ってきた。ただ、ライバルが減ったおかげで、下げ止まりの感。現在も電気関係の売り上げ 2 割は、地域の電器屋が担っており、これからも残っていくのではないか。

また、中山間地域では、電器屋がなくなってしまい、住民が困っているといった事例もある。ある地域では競合する電器屋がなく、景気が良いとも。



【浜松市への期待度グラフ】

●30 年後の世の中に向けて

新興住宅地は、人口が増えているが、一挙に年を取ると言われている。中野町や笠井町などの昔からのまちの人口は増える見込みはなく、中山間地域は減少傾向にある。決して道路などのインフラ整備ばかりが必要な訳ではない。こうした将来をしっかりと見据えて、必要な施策を行ってほしい。

伊藤（いとう）　基久（もとひさ）さん

浜北手をつなぐ育成会 会長（知的障害者相談員）

[伊藤基久さん]
浜北生まれ、浜北育ち。自身の経験を踏まえ、様々な活動に取り組む。これからの時代、人と人とのつながりと地域力の向上が最も大切と語る。

●親が子の障がいを受容できる手助けを

当会は、知的障がいの子をもつ親の会で、法や制度の勉強会や家族間のつながりを深める研修旅行などを行っている。障がいのある子を持つ親は、子が生まれて、不安と葛藤がある中で子育てが始まる。親が子の障がいを受容できるかが大切で、その手助けができればと思っている。

会員数は現在約 250 世帯。浜北区は全世帯が賛助会員で、昔から地域の理解がある。今後も障がい者の自立と雇用推進、ノーマライゼーション理念の啓発など、積極的に取り組んでいく。

●未来に向けて「やらまいか」気質を発揮

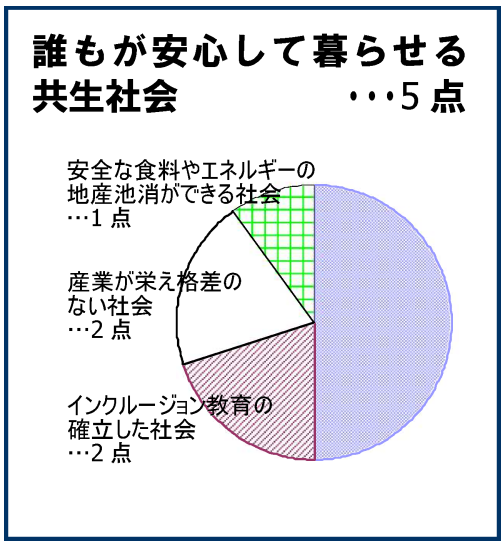
山間地域から、田畑、都市部、海岸地域まで多様な自然環境と文化を有し、日本の縮図的な地域である浜松市。その地域性をまだ活かせていないと感じるが、未来に向けて、先駆的な社会構造を構築できる可能性を秘めているのではないか。

また、医療、福祉施設が多いものの、それぞれの機関のネットワーク化は始まったばかり。今後は、医療分野の充実を売りにしてもいい。

中心市街地の衰退や、産業の空洞化が進む中、行政は、市民と一体となって「やらまいか」気質を発揮し、未来へ向けて積極的なビジョンを示さなければならない。

●誰もが安心、安全に暮らせる社会に

障がいに対する差別や偏見をなくすためには、子どものころから、障がいの有無に関わらず、ともに学ぶ開かれた包括的な教育、インクルージョン教育の推進が必要である。



【浜松市への期待度グラフ】

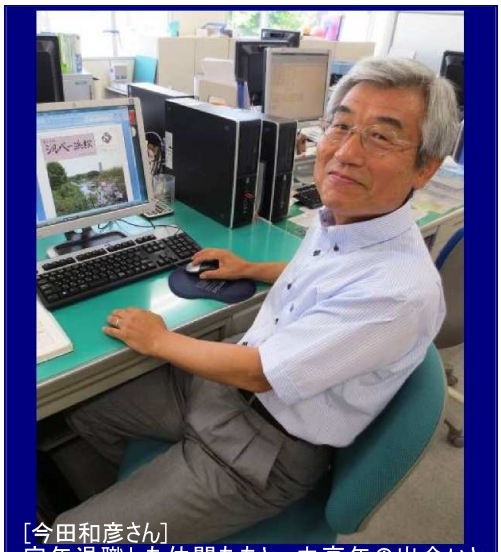
超高齢化、核家族化が進んでいることを実感しているが、障がい者も高齢者も大切なのは「生きがい」であり、自然豊かな中山間地域の活用など地域の特色を活かした取組も重要だろう。

また、様々な医療及び福祉分野等の施設や事業所のネットワークの構築や立場が弱い人たちへセーフティーネットの確立を施策で実施していくべきではないか。

そして 30 年後に向けて、障がいがあっても、高齢者でも、子どもでも、誰もが安心、安全に暮らせる共生社会の確立を望む。

今田（いまだ）　和彦（かずひこ）さん

公益社団法人浜松市シルバー人材センター理事



[今田和彦さん]
定年退職した仲間たちと、中高年の出会いと交流を目的に、「アクティブシニアネット」を設立。高齢者が地域社会に出て、健康で生きがいのある生活を送るお手伝いができればと願う。

●「シニアの生きがいづくり」がテーマ

定年退職後、超高齢社会に視点を置き、一貫して「シニアの生きがいづくり」をテーマにボランティア活動などを行ってきた。シルバー人材センターでは、臨時職員として会報誌の編集に携わったのをきっかけに、理事を務めて４年。会報誌の編集は現在も続けている。草刈、庭木の剪定、家事援助、駐車場管理など当センターが依頼される業務は多岐に渡り、現在約 4,000 名の会員がいるが、それらに対応する知識、経験を持った多様な人材が求められている。

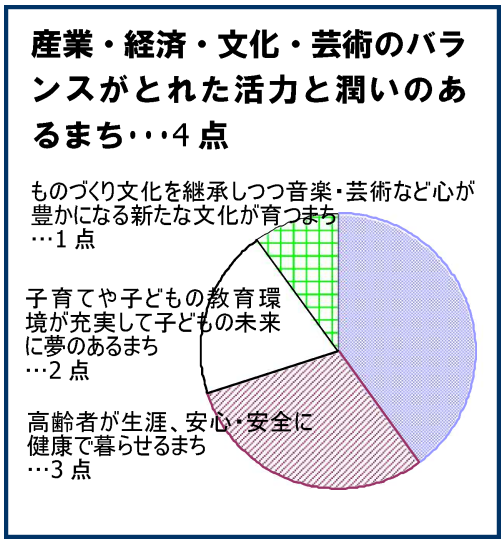
●超高齢社会に対応した発想の転換を

浜松市は、首都圏と関西圏のほぼ中間にあり、新幹線、新旧の東名高速道路など広域交通インフラにも恵まれ、浜名湖、天竜川、北遠の森林など自然環境も豊か。自然災害も比較的少なく、気候も温暖で住みやすいまちとして定評がある。

ただ、北遠地域では、過疎化と高齢化が極めて進んでいる現実がある。交通環境を整え、中心市街地と北遠地域の交流人口を増やし、中高年の趣味や生涯学習の場、子どもの野外学習の場として芸術村の創設や長期滞在型の学習村などに活用を図るのも一案である。

また私を含め、すべての市民が、中心市街地の衰退を危惧している。「中心市街地の活性化には商業施設を」という固定観念は改め、超高齢社会に対応したコンパクトなまちづくりを目指すなど、発想の転換が必要ではないか。

一方、「楽器のまち」から「音楽のまち」を目指して久しいが、浜松市民の日常生活の中で、文化として「音楽のまち」が育つには、まだまだ歴史的な時間が必要だと思う。様々な取り組みを継続することで、「文化・芸術」を高めて、「ものづくり」と「文化・芸術」のバランスのとれたまちづくりを目指したい。



【浜松市への期待度グラフ】

●高齢者同士で自立する仕組みが必要

超高齢社会を迎え、高齢者は、従来の「若者に頼る」という発想ではなく、全く新しい人生のスタートととらえ、元気な高齢者がそうではない高齢者を地域ごとに支える仕組み、姿勢が必要である。それには普段から隣人同士の交流、コミュニケーションを図っておくことが重要だ。行政だけを頼るのには限界がある。

また、将来を担うのは子どもたちである。子育て世代をしっかり支援して、次世代の子どもたちに浜松の将来を託したい。

井柳（いやなぎ）　誠（まこと）さん

NPO 法人水辺の里まちづくりの会

天竜川・県排をきれいにする会

[井柳誠さん]
河川環境保全と言えば、上流部と思われがち。河口部にも関心を持ってほしいと語る。

●産業構造の変化に強い産業を

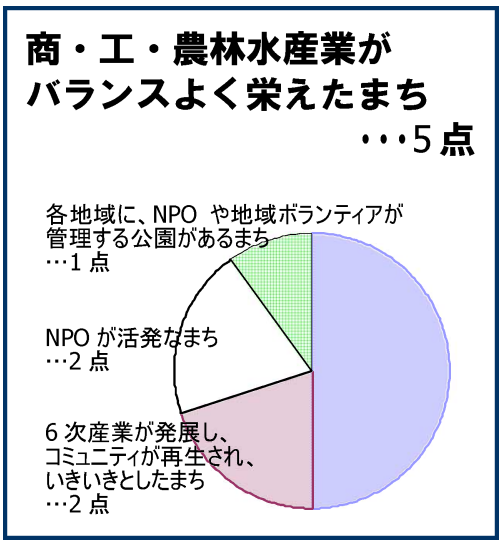
浜松市は世界的な企業を中心に、「ものづくり」を発展させてきた。世界に誇れる技術で、浜松市特有の「ものづくり」を生み出した頭脳は依然として強みである。しかし、今後、浜松市の産業が特定の工業製品に特化していることが欠点になるのではないか。それは、国内外における産業構造の変化に対応しきれなくなる可能性があるからだ。現在、国外に生産の拠点を移す企業が多いが、これまで新しい技術を生みだしてきたことを強みにし、浜松市の得意分野を伸ばすとともに、他の産業も幅広く発展させることができれば、安定した社会が築けるのではないだろうか。

●エコミュージアム構想

浜松市には多くの芸術、文化、伝統、自然、特産物などがある。しかし、全国的に見れば、それらの認知度は低い。また、浜松市の様々な文化施設や観光地は、市外から訪れた方にとっては、何を見れば良いのか、次はどこに行けば良いのかわからない。こうした弱点を強みに変えるために、浜松市全体をエコミュージアムとしてまちづくりを考えてどうだろうか。そのためには、広い視野を持つことが必要である。来訪者の導線を確保するための交通体系の見直し、特産物が販売される道の駅のような施設の設置など、浜松市の文化や自然などを広めるためにも、大胆な政策が必要だと思う。

●6 次産業の活性化を

今後ますます増えると予想される遊休農地を有効利用するべきである。そこで、6 次産業を普及させてはどうだろうか。特定の事業者では行われているようだが、農地を持っている人や地元の NPO などが地域の取り組みとして 6 次産業を実施し、それを根付かせていきたい。そのためには、加工しやすいような農作物を新たに栽培する必要があるかもしれない。行政、民間、大学等の研究機関と連携して、6 次産業を見据えた新しい農産物の開発することが必要になると思う。行政が介入し法人化して、6 次産業を推進することもできると思うが、地元の土地を地元の人が有効に使うことが重要である。また、新しい産業ができれば、そこに雇用も生まれる。農業ならば高齢者にもできることが多いと思う。そうした中で地域の取り組みが評価され、他の地域へ活動が広がっていけば、地域のコミュニティの再生も進むと思う。



【浜松市への期待度グラフ】

岩井　万祐子さん

株式会社ホト・アグリ代表取締役

[岩井万祐子さん]
子育て中の母親の社会進出促進のため、官民一体となり子育てを応援する環境整備が必要と語る。

●元気な企業と若者が盛り上げるまち・浜松

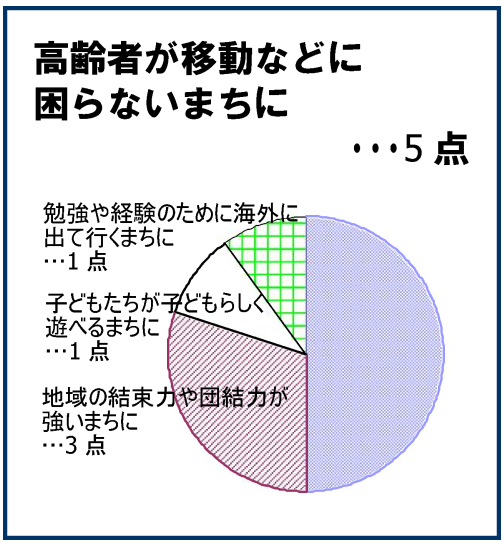
浜松には、光技術、楽器、輸送用機器など、世界トップクラスの技術を持った企業がある。それらの産業を支える中小企業も、切削、プレス、鋳造、鍛造などの各分野で非常に優れた技術を持つ企業が数多く存在する。さらに、地域の大学・短大の学生は純粋で若者らしい発想で、縁の下の力持ちとなっており、地域産業を盛り上げる構造が出来上がっている。また、「浜松まつり」を中心に若者が結束し、地域を元気づけている。この企業群と若者の元気が浜松の特色であり、パワーの源である。

●子育てママに働く場所を！ 子育てしやすい環境を！

会社では、紫外線を使って害虫を駆除しながら、無農薬野菜を栽培している。農作業は休みがなく朝から晩まで働き詰めで、作業自体も過酷というイメージもあると思う。しかし、会社で働く女性は全員子育て中である。作業時間を平日の昼間に限定し、仕事と子育てが両立できるようにしている。また、作業環境もできるだけ工夫し、育児で疲れた体に極力負担をかけないような配慮をしているつもりである。私自身も子育ての真っ最中であり、仕事をしたい子育てママが働きやすく、子育てをしやすい環境を整えることができれば、浜松はもっと住みやすいまちになる。

●若者が中心となり、活躍できるまち

未来の浜松を引っ張る若者が中心となり、これまで先人たちが築き上げてきた浜松の文化と伝統を守りつつ、時代の流れを察知し、必要なものやことを取り入れることができる環境を整えていくことが、30 年後を見据えたまちづくりに必要である。



【浜松市への期待度グラフ】

●忙しいお母さんはアイデアの宝庫

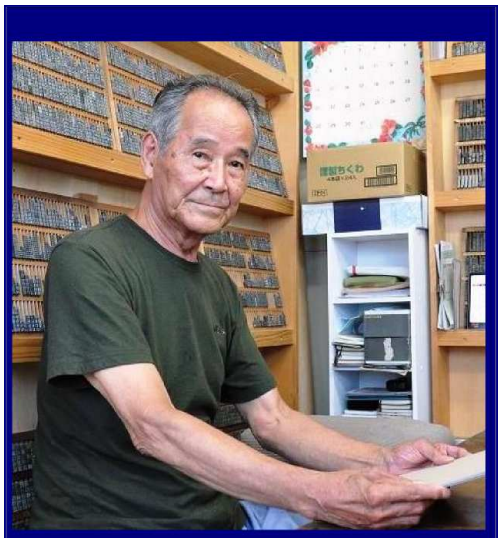
子育て中の女性が働ける場所が増えると良い。特に農業分野では、我が子に安心・安全なものを食べさせたいと日ごろから意識している母親の視点が、作物栽培に役立つ。

また、家庭との両立を考えると、働くことができる時間も限られているため、作業効率を常に意識することになる。その結果、効率性を追求した仕事の進め方のアイデアが生まれてくるはずである。

私自身、母として、会社経営者として、必要な勉強を続け、地域の、社会の、子育てママの役に立つ存在となっていきたい。

内山（うちやま）　博之（ひろゆき）さん

八幡通り街路樹愛護会　会長



[内山博之さん]
製本屋を営みながら、八幡町公会堂の管理人も務めている。

●花とみどりのまちづくりを！

浜松市には、フラワーパーク・フルーツパーク・ガーデンパークなど大きな公園がある。平成 26 年春には、「浜名湖花博 2014」が開催されることから、多くの集客が見込まれ、公園の価値が一層高まることが期待される。

街路樹愛護会では、活動を通じて、地域とのつながり、人々の交流の輪が広がっている。今後、会員の増員も含め、花とみどりのまちづくりを活発化していきたい。

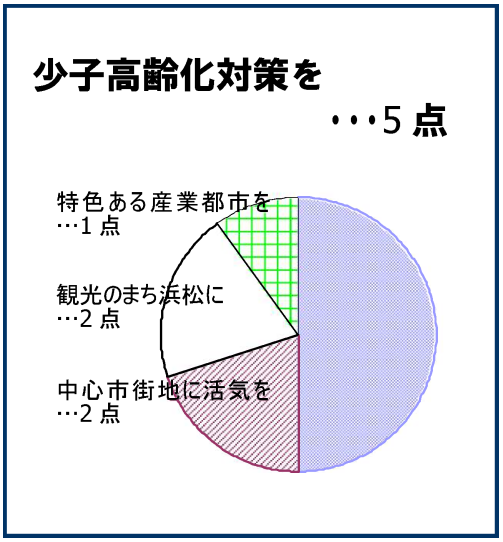
●中心市街地の活性化を！

中心市街地の一等地にぽっかり穴が空いている。ここ 20 年で百貨店が次々と姿を消し、大型の商業施設が郊外に出店するようになって、人やお金の流れが変わってしまった。幼少期、学校から帰ってくると、デパートへよく遊びに行っていたことを思い出すと、残念な気持ちになる。

中心市街地に、もっと活気や人の流れがあるまちづくりを進めてほしい。

●道路を活かした特色ある産業づくりを！

新東名高速道路が開通したことにより、交通の便が格段に良くなった。浜松を横断する環状線や、将来飯田まで繋がる三遠南信自動車道など、浜松にはすばらしい道がいっぱいある。立地条件もよく、津波の心配もない、都田のテクノポリスなどの内陸部に企業を誘致することによって、雇用が促進され、30 年後は発展していることと期待している。



【浜松市への期待度グラフ】

●子どもと一緒に通勤できる職場を！

昔は、自分の親に子どもの面倒を見てもらって、仕事をしていた。今は、共働きが増えており、親と同居していないことから、子どもを預けなければならないが、預ける施設が遠かったり、空きがなかったり、保育施設が不足しているのではと感じる。

病院によっては、事業所内保育を実施していると聞く。子どもと一緒に通勤できるような職場が増えることを期待している。

私自身今は元気だが、いずれは、老人福祉施設等を利用することになると思う。市内にある施設は、利用料等が高額と聞いており、今後に不安を感じている。

浦（うら）　かおりさん

スズキ株式会社　経営企画室

[浦かおりさん]
いつも笑顔で職場を明るい雰囲気にするムードメーカー。最近は大型二輪免許を取得。
オートバイは男だけの乗り物じゃない！

●セニアカーの可能性

アメリカのディズニーランドに行った。すると、セニアカーに乗りながらアトラクションを楽しむ人の姿を多く見かけた。各所で専用スペースがあり、段差も解消されている。バスの運転手やアトラクションの担当者も手馴れた様子で受け止めている。来場客の理解もある。

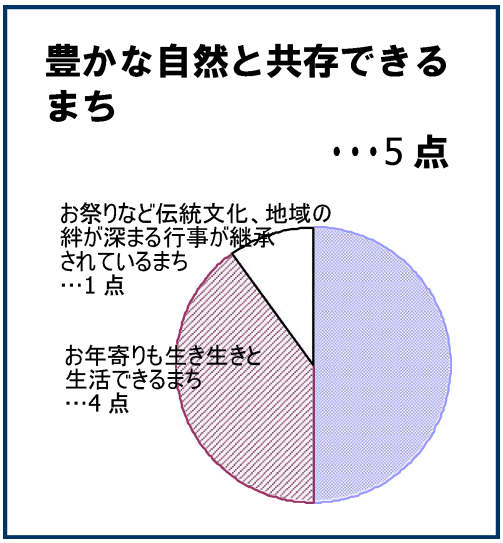
日本におけるセニアカーの普及はまだまだ。セニアカーでの外出に抵抗感があるようだ。メーカーとしては、不便を解消する機能性や乗ってみたいと思わせるデザイン性を高めていくことが必要。一方、行政には、安全に移動できるハード面の整備や周囲から理解される環境づくりを進めてほしい。

高齢になって、歩行が難しくなると、一人で出かけることに不安を感じ、家に引きこもりがちになってしまう。自由に外に出て、自然に触れて、人に出会って、刺激を受けながら楽しく過ごしたいはずである。そんな思いを手助けするのがセニアカー。お年寄りの不便や抵抗をなくし、生き生きと暮らせるまちをつくりたい。

●日本と海外の自動車の売れ行き

インドでは、セダンが売れ、インドネシアでは MPV や SUV が売れる。新興国では、初回購入者が多く、購入者の平均年齢も若い。日本の車の保有台数は飽和状態で、今は、乗り換えのお客様をターゲットにしている。ただ、車の購入意欲が高い若い女性層で、他社との競合が激しい。この点に関しては、宣伝効果などイメージ戦略に改善が必要と考えている。

電気自動車など次世代のクルマに関しては研究を進めているが、まずは、一般車の燃費を良くすることに力を入れている。燃費の改善は、まだまだ追求の余地があると思う。



【浜松市への期待度グラフ】

●外から浜松を眺めると

浜松といえばマリンスポーツ。名古屋や福井などから何時間もかけて浜松に来る人もいるのに、20 分あれば、海に行ける。浜松に来て 2 年になるが、この点は恵まれている。それから BBQ。浜松の夏は、川べりで毎週のように楽しんでいる。

30 年後も、自分の子どもや孫たちが、自然の偉大さを感じつつ、海で、川で遊ぶことができるまちになってほしい。アカウミガメが産卵する海岸があることは何よりも誇り。

それから、地域の伝統行事を見ると、地元への愛着のある市民が多いまちと感じる。私もその一員になれたら…と感じる。